

第76号
平成27年
3月

HPに 創刊号から
連載中

もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意
深く徐々に試してください。

山田整骨院
熊本市中央区出水 4-25-1
096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

熊本交通事故, 山田整骨院

<http://www//jiko-kumamoto.net/>

歯と眼の疾患

西 勝造先生 昭和25年 ミルマグ友の会刊

腸の状態が歯齦及び歯を冒すであろうと云うことは、一見、牽強附会とも思われ、有り得べきではない様に、且つ、信じられないように思われるかも知れない。然しながら、これは疑いもなく事実である、栄養管は口腔から下方出口にまで及んでいる。従って、この全管の重要な部分に於ける重症性変質は、先ず第一にかかる傷害を蒙った部分と最も緊密な関係にある部分に影響を与えるのは当然である。宿便保留即ち慢性腸停滞と関係ある病的過程は、上方へ拡張して胃を冒す傾向があり、…略…そうだとすれば、この障害が胃に止まらずして、更に上方に及んで口腔にも達しないと云う理由はない。それだけでなく、歯齦と歯の健全さは、勿論、その日々の栄養、特にビタミンCの欠乏が、その主因であって、これは柿の葉から採ることも出来るし、生野菜、果物から採ることが出来る。そして他は白砂糖類で造った菓子などの過食に所依するものである。健全な血液と、その他の体液とによって確実に養われる歯齦と歯は、不健全な欠乏性物質、かなりな量の有害性物質を含む混合物質を絶えず支給される歯齦と歯よりも健全である。腸による自家中毒症が、全身体の損傷と変質とを招来するものとすれば、歯がこの一般原則の例外をなす理由もなかるまいではないか。…略…

宿便即ち慢性便秘及ち慢性腸停滞を起し、中毒症に陥れる腸がわれわれの歯齦と歯を毒するものとすれば、それが、われわれの眼にも類似の傷害を与えるとしても、われわれは殆んど驚くに足らぬであろう。…略…著名な眼科医ダブリュー、ラング博士は、中毒症の腸が膿漏及び視力の障害又は喪失を招来すべき結果を持っていることに関し、次の様な興味深いことを強調して述べている。“或カナダの外科医は、その若い妻が、片方の眼の中央視力を迅速に失ってきたので、英国へ連れてきたことがあった。彼の妻は、その視力が指を数え得るのが見えるに過ぎなかった、中央脈絡膜炎に対しては、極めて軽微な膿漏以外、なん等の確定的な原因も見出されず、膿漏も間もなく、治癒せられた。視力の改善は、少しも起こらず、他方の眼の視力も、同じ原因のために消失し始めた。一週間中に視力は5分の5から18分の5に減じたので、この期間内に於いて、虫垂を切除することに決定した。虫垂は三年前に急性炎症を起こしたのであるが、今日では鎮静していたと云われていた。尚、又手術の際に胆嚢、大腸、卵巣、子宮を検査することに決したが、これ等は凡て健全であることが知られた。虫垂は、癒着から離れていたが、末端が球状をなしていた。

これを検査してみると既往炎症の証拠が明示せられた。…略…手術が行われてから三週間を経た後、最初に冒された眼の視力は9分の5であり、他方の眼の視力は5分の5であった。四ヶ月後、両眼の視力はいずれも正常となった。…略…

著名な眼科医アーネスト、クラーク博士は腸内便停滞が、眼の早老性衰退、レンズの硬化症を招致し、それは迅速に盲目又は近似盲目状態となることを指摘した。クラーク氏は、次の如く述べている。“四十八歳のある人は、正常以下の調節力を有する男子であった。彼は便秘に冒されている疑いはなかったけれども、虫垂炎に苦しめられていた。レーン卿が彼を手術したところ、極めて悪い状態が見出され、多年に及び常習性腸麻痺が挙示せられた。回復後、彼は腸に対して最も注意を払うようになり…略…その結果、数年を経た今日に於いては、彼の調節力は、平均より三歳高く、彼はその年令より遥かに若々しく見えるのである。この病例によってみても、われわれは、右のような処置により、眼の水晶体の老衰過と身体の他の部分に於ける老衰過程とをしばしば停止させるならば、患者の失った青春の幾分を回復させ得るのである。…以下略。

解 説

この冊子には他にも、眼の紅彩炎が臼歯の歯齦の膿瘍から生じていて、歯齦の摘除と眼の湿布の後、紅彩炎は治癒し視力も正常になった事等が記載されています。いずれにしろ便秘の毒素が歯と眼の疾患を起こすというのが本書の主旨です。去る2月22日NHKスペシャルで、“腸管フローラ”という番組が放映されました。人間の腸に100兆の微生物が存在し、それらの出す物質が身体の様々な活動に関与している事の研究成果の報告でした。原因の分からない、治療方法の無い、具合の悪いご婦人の腸内体液を排出して、健康な人の便微生物を希釈してその人の腸に注入する治療が行われました。その結果、わずか2、3日後その女性は病気であった事が嘘だったみたいに元気になり、にこやかで若々しい笑顔が体調が回復した事を表わしていました。又、腸内状態を悪くしたマウスは臆病で、良い状態のマウスは勇敢であり、そしてその腸液を入れ替えた実験を行った所、マウスの性格が変わった姿も映し出されました。人間の場合でも腸内状態により性格が変わり、又、糖尿病、アレルギー等に影響があることが報じられていました。腸の状態を良くすることで健康を保ち、病気を治すのは、それこそ西医学健康法が昔から唱えている方法です。究極の治療法は断食療法、生野菜療法であり、両者とも宿便を排除し腸を綺麗にします。脳卒中、アレルギー、うつ病、糖尿病等々難病を治すことの出来る治療法です。西医学は80年の歴史を有し数多くの症例があります。所で腸内液の実験は日本では既に昭和11年慶応大の川上漸教授が兎で行って、人工的に腸停滞（糞詰り）を起させて、脳卒中を起こした兎の体液を健康な兎に注入して脳卒中を起こさせ、腸内毒を立証した経過があり、西医学はそれに注目して宿便の害を喧伝しています。便秘は万病の元であり、まずはその排除が必須という事です。残念ながら現代医学はその貴重な実験成果を無視しました。今回の腸管フローラも無視する可能性があります。

